頬部に発生した血管線維腫の1例

山下 知巳^{*,**}・山下 徹郎^{*}・柴田 敏之^{*}
 栃原 義之^{*}・中嶋 頼俊^{*}・向後 隆男^{***}

A case of angiofibroma in the cheek

Tomomi YAMASHITA^{*,**}・Tetsuro YAMASHITA^{*}・Toshiyuki SHIBATA^{*}
 Yoshiyuki TOCHIHARA^{*}・Yoritoshi NAKAJIMA^{*}・Takao KOHGO^{***}

Abstract: Angiofibroma is a rare type of benign tumor. It mostly occurs in the nasopharyngeal area of juvenile males. A huge angiofibroma in the right cheek of a 76-year-old female is described. The tumor was removed under local anesthesia with an intraoral approach. It measured 70×85 mm and weighed 150 g. The histopathological diagnosis was angiofibroma. Her progress has been favorable 23 months after the operation.

Key words: angiofibroma (血管線維腫), cheek tumor (頬部腫瘍), oral tumor (口腔腫瘍)

緒 言

血管線維腫は、良性腫瘍のなかでまれなもので、そのほとんどが耳鼻咽喉科領域から特異な疾患として報告されており、口腔外科領域での報告はきわめてまれである。

今回われわれは、76歳女性の頬部に生じた大きな血管線維腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：76歳 女性。

初 診：1991年6月■日。

主 訴：右頬部腫瘍。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：1973年に左卵巣嚢腫摘出。1986年よりうっ血

写真1 初診時顔貌

性心不全、心房細動、高血圧症にて某病院で入院加療を受けていた。

現病歴：1973年頃より右頬部腫瘍を自覚していたが、無痛性であったため放置。その後増大傾向を示したため、当科を初診した。

現 症：右頬部に70×85 mm大の皮下腫瘍を認めた。腫瘍は境界明瞭、弾性軟で皮膚と可動性を有し、被覆皮膚の表面は正常であった(写真1)。開口障害は認めず、頬部の腫瘍は口腔側の粘膜下に25×37 mm大で突出していた。被覆粘膜の血管に怒張を認め、腫瘍は境界明瞭、弾性軟で粘膜との可動性を有していた(写真2)。

CT 検査：右頬部に内部均一でCT値35の、頬筋より口腔側に存在するだるま状で境界明瞭な腫瘍を認めた(写真3)。

臨床検査：24時間クレアチニンクリアランス23.1 ml/

* 恵佑会札幌病院歯科口腔外科
 (主任：山下徹郎部長)

** 北海道大学歯学部口腔外科学第一講座
 (主任：福田 博教授)

*** 北海道大学歯学部口腔病理学講座
 (主任：雨宮 璋教授)

* Department of Dentistry and Oral Surgery,
 Keiyukai Sapporo Hospital (Chief: Tetsuro Yamashita)

** First Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Hiroshi Fukuda)

*** Department of Oral Pathology, Hokkaido University School of Dentistry (Chief: Prof. Akira Amemiya)

受付日：平成5年8月9日

写真2 初診時口腔内

写真3 CT像

写真4 術中

min であり、腎機能障害を認めた。

処置および経過: 局麻下で、右口角より耳下腺乳頭下まで粘膜切開を入れ、さらに皮膚に補助切開を入れ、口腔側より腫瘍を摘出した(写真4)。腫瘍は周囲組織と癒着なく剥離は容易であった。

摘出物: 摘出物は重量 150 g, 70×85 mm の雪だるま状の形をしていた。断面は一様に白色を帯び充実性で、線維性被膜に包まれた大小2つの部分に分けられていた(写真5)。

病理組織学的所見: 周囲は比較的密な線維性組織で囲

写真5 摘出物

写真6 多数の小血管と線維性組織の増生
(H-E 染色, ×180) 写真7 血管周囲の線維の硝子化傾向
(H-E 染色, ×360)

まれた充実性の腫瘍で、増殖の主体はクロマチンが粗に分布した楕円形の核と紡錘形の胞体を有する細胞よりなり、細胞周囲には一般に比較的密に配列した膠原線維がみられた。細胞および線維の配列は部位により多少異なっており(写真6)、一般的に比較的細い線維が束状を

写真 8 退院時顔貌

呈し、種々の方向に走行する不規則な配列を示していたが、部位により疎となり粘液腫様な性状を示す部位も認められた。このような線維腫様組織中にはほぼ全域にわたって多数の小血管が認められ、壁は1層の内皮細胞のみからなっていたが、時には平滑筋層を有していた。多くの血管は周囲を硝子化した線維に囲まれていた(写真7)。

以上の所見より、血管線維腫と診断された。

考 察

血管線維腫は、良性軟部組織腫瘍のなかでまれなもので、遠城寺ら¹⁾によれば、良性軟組織腫瘍8,086例中49例(0.6%)にすぎない。そのほとんどは、鼻咽腔に発生し、若年男性に多いことから、鼻咽腔血管線維腫^{2,3)}、若年性鼻咽腔血管線維腫⁴⁾として扱われている。鼻咽腔以外の報告は、われわれの渉猟した限りでは、軟口蓋⁵⁾、副鼻腔⁶⁾、鼻腔⁷⁾、胃⁸⁾、縦隔⁹⁾、皮膚、口腔領域¹⁰⁻¹⁵⁾であり、特に口腔領域では6例を認めるのみである。

本腫瘍の成因については、あきらかではないが、ホルモンの関与³⁾などが考えられている。本腫瘍の治療法としては、手術療法が優先し、手術困難な症例に対してのみ、ホルモン療法、放射線療法、薬物療法が行われている。今回われわれの経験した症例は、76歳の女性の頰部に発生した大きなもので、きわめてまれな症例と思われる。

手術後1年11か月を経て現在経過良好である(写真8)。

結 語

頰部に発生した血管線維腫のまれな1例を経験したので、若干の考察を加え報告した。

なお、本論文の要旨は第19回日本口腔外科学会北日本地方会(福島)において発表した。

引 用 文 献

- 1) 遠城寺宗知, 岩崎 宏, 他: わが国における良性軟部組織腫瘍. 癌臨 20: 594-609 1974.
- 2) Enzinger, F.M. and Weiss, S.W.: Soft tissue tumors. 2nd Ed, Mosby Co, St Louis, 1988, p 127-129.
- 3) Girgis, I.H. and Fahmy, S.A.: Nasopharyngeal Fibroma. J Laryngol Otol 87:1107-1123 1973.
- 4) 遠城寺宗知, 曾田豊二, 他: 若年性鼻咽腔血管腫の臨床病理学的検索. 耳鼻 9: 76-86 1963.
- 5) 頼実一男, 末藤頼男, 他: 軟口蓋混合腫瘍(血管線維腫)の一症例. 耳鼻 5: 110-113 1959.
- 6) 菊地正明, 三浦英子, 他: 上顎洞に原発した血管線維腫の1例(抄). 日口外誌 24:1338 1978.
- 7) 平出文久, 松原 宏: 若年性鼻腔血管腫の1例. 耳喉 50: 991-997 1978.
- 8) 稲越英機, 原 敬治, 他: 十二指腸下行脚に脱出せる巨大胃血管線維腫の1例(抄). 日医放 32: 649 1972.
- 9) 古賀昭夫, 中村 敬, 他: 縦隔血管線維腫の1治験例. 胸部外科 26: 331-334 1973.
- 10) 瀧川富雄, 寺門正昭, 他: 下顎前歯部に生じた血管線維腫の1例. 日大歯学 57:415-420 1983.
- 11) 杵渕孝雄, 菊田高行, 他: 口底部に出現した血管線維腫の1例. 日口外誌 27: 604-612 1981.
- 12) 川崎隆義, 須川委洪, 他: 側頭窩下から発生し上顎骨を著しく侵した管腫性血管腫の1例. 日大歯学 44: 153-156 1970.
- 13) 久野吉雄, 鈴木 修, 他: 下顎臼歯部に発生した血管線維腫と思われる一症例について(抄). 日口外誌 21: 860 1975.
- 14) 宮脇昭彦, 登 正太郎, 他: 上顎に生じた Juvenile angiofibroma の1例(抄). 日口外誌 39: 1171 1990.
- 15) 鈴木一郎, 鈴木 誠: 口唇に発生した angiofibroma の1例(抄). 日口外誌 38: 173 1992.